

古仏語における« puis que »の「時」と「理由」の用法

— 『アーサー王の死』から —

太 古 隆 治

古仏語のテキストに接する者は、« puis que »がしばしば「時」の用法として使用されている場面に会う。「 puis que »の意味合いはもともと「時」の範疇に属するものであるから、そのような出会いに特に不思議はない。ただ、現代フランス語では専ら「理由」を示すために使用されるこの従属接続詞の本来の用法をそこに実感するだけのことである。

私は、2年前「古仏語複文の二文型について」¹⁾と題し、古仏語複文に認められる二つの異なる文型、すなわち従属節が主節の語順と無関与のもの（「並列型」）と従属節が主節の語順を規定するもの（「一文型」）について概観を行った。動詞第二位文の定着の中でその拡張として発生した比較的新しい文型と思われる「一文型」が、« ainz que », « por ce que »など限られた接続詞に特有のものであるのに対し、もう一方の「並列型」を守るものは« quant », « se », « puis que »など数多い。先の論文の要点は以上に帰されるが、なお厳密な検討を要する点も少なくなかった。本稿は、« puis que »に認められる二つの用法（「理由」／「時」）と、相異なる二つの文型（「並列型」／「一文型」）との対応関係に着目し、先の論文に関し補足と修正を加えるものである。

なお、資料は主に『アーサー王の死』²⁾（13世紀初頭）に拠っており、従って結論を一般化して古仏語全般に及ぼせるものではないことを予め断っておかねばならない。

* * * * *

『アーサー王の死』から« puis que »で始まる副詞節がその主節に先行している例を抽出すると全部で36例が得られた。³⁾ 次頁の表は、その36例を主節のタイプ別に分類し、用例数とその割合を振り分けたものである。まず、SVC主節の頻度の高さが際立っており、現代フランス語と同じこの語順が最も好まれていることがよく分かる。これにCVS主節のもの、VS主節のものを加えると、主語を有する主節は34例となり、全用例の94%を占める。反対に、主語を欠く主節は36例中2例（6%）に過ぎず、

それも後に見るように欠けているのはある状況における非人称主語に限られている。ちなみに、『アーサー王の死』において< quant >で始まる複文の場合、主節が主語を有するものは60%足らずであり、それと較べると< puis que >の場合の主語の重要度が理解されよう。⁴⁾

並列型			一文型	計
SVC	CVS	CV	VS	
29 (80%)	1 (3%)	2 (6%)	4 (11%)	36 (100%)

< puis que >節と主節のつながりが「並列型」であるものは合計32例になり、全体のほぼ9割を占める。逆に、「一文型」用例は全テキスト中4例と極めて少ない。本稿で使用したテキストの頁数は263であるから、「一文型」が現れるのは大体65頁に1回程度でしかない。< puis que >に関し、その文型と用法との対応関係にこれまで注意が行き及んでいないのも、こうした用例の偏りのせいと思われる。以下、表に示した主節のタイプ別に用例を追いながら、この対応関係を明らかにしていきたい。なお、以下に引用する古仏語の用例には、主節の動詞部分をイタリック体で示し、加えて拙訳を付すものとする。

1 a. puis que..., SVC

Ex.1) puis que vos le connoissiez, vos *me poez* bien dire qui il est,

(24, 14-6)

(あなたはそれをご存じである以上、彼が何者なのかおっしゃって下さることが
できるはずです。)

この例文にこと細かいコメントは不必要であろう。主節の語順も現代フランス語と同じなら、< puis que >の意も現在の< *puisque* >と変わらない。下の例文2も同様である。

Ex.2) puis que il se velt celer, je *feroie* trop grant vilenie outreement,
se ge l'en descouvroie a vos ne a autrui; (24, 17-9)

(彼が正体を隠しておきたがっている以上、もし私があなたであれ他の者であれ
人にそれを明かしてしまえば、それはこの上なく恥ずべき行いをする
ことになる。))

結論を半ば先取りすることになるが、例文1, 2のようなSVC主節を持つものに限らず、総じて「並列型」構文の用例に現れるのは、*« puis que »*の本来の意、すなわち「時」ではなく、その派生的用法の「理由」である。そして、それにふさわしい標準的訳語が*« puisque »*であることは言うを待たない。

ただし、稀ではあるが次のような場合もある。

Ex. 3) *puis qu' il i sera remés et nos porrons legierement savoir ou il sera, nos irons sus lui atout tel plenté de gent que nos le prendrons legierement.* (98, 39-42)

〔彼がこの地に留まってしまう、我々がその所在を容易に知ることができれば、彼をたやすく捕まえるにたる軍勢を率いて彼に襲いかかろう。〕

さらに次もこれによく似た例である。

Ex. 4) *puis que nous serons venu en nostre país entre nos homes liges, et nous avrons mandé nostre pooir et nos amis, et nous avrons nos chastiaus garnis et nos fermetés, je vous asseür que, se vous i venés et nous vous volons de tout nostre pooir nuire, onques certes chose ne feistes dont vous vous repentissiés autant comme vous ferés de ceste;* (119, 109-16)

〔我々が忠誠を誓う者たちと国に帰り、そして兵と友邦を招集し城や砦を固めたあかつきには、あなたが攻め寄せてきたとしても我々が全軍をあげてあなた方を害する気になれば、あなたはこの度味わうほどの後悔をいまだかつて味わったことはないとは私は断言します。〕

この二つの例の場合、*« puis que »*節に前未来（部分的に単純未来）が使われているため、例文1や例文2のように*« puisque »*では納まりが悪い。『アーサー王の死』の現代フランス語訳には G. Jeanneau のものと M. Santucci のもの⁵⁾の二つがあるが、いずれの訳者も例文3の*« puis que »*には*« dès lors que »*を、例文4のそれには*« lorsque »*を当てている。先の2例の*« puis que »*の意が「理由」であったのに対し、二人の訳者がこの2例に当てた訳語は「時」の範疇に属するものである。

もとより「時」の意から発し、のちに「理由」の意をも併せ持つようになった接続詞の様々な用例に対し、「時」か「理由」かを判別する絶対的基準は存在しようがない。しかし、本稿の目的は、「並列型」複文の全てに一本の共通線を（そして「一文型」複文には別の共通線を）求めることにある。そこで、次のように考えることで、

ここで問題となっている二つの例が、先の例文1, 2とさほど隔たったものでないことを示したい。本来« puis que »は「時」の接続詞で、なにか副詞（または前置詞）« puis »の意を受け« postériorité »を表す。ところが、例文3, 4においては、単なる時間上の「前」と「後」の関係を越え、« puis que »節は、主節の内容が実現されるための前提条件となっている。そこに« puisque »を当てはめることができないのは、「理由」が読み取れないためではなく、« puis que »節内に用いられている時制のためであると言わなくてはならない。実際、« puis que »節内の時制を下のよう—— 前未来を複合過去に、単純未来を現在形に（主節にはなんら手を加えることなく）—— 書き改めるとどうであろうか。

puis qu'il i est remés et nos poons legierement savoir ou il est,
nos irons sus lui atout tel plenté de gent que nos le prendrons
legierement,

puis que nous sommes venu en nostre país entre nos homes liges, et
nos avons mandé nostre pooir et nos amis, et nous avons nos chas-
tiaux garnis et nos fermetés, je vous asseür que, ...

言うまでもなくこれはコンテクストからは逸脱してしまうが、文自体としては完全に通用する。そしてその場合、誰もが何のためらいもなく« puisque ... »と訳出してゆくだろう。ここに、ほかの全ての「並列型」用例とこの2例との共通性があり、また後ほど「一文型」で見ることになる「時」の用法と違いがある。

この点に加え、例文3と例文4は稀な用例であり、SVC主節を有する29例中27例までが例文1, 2と同じように迷わず« puisque »と置き換えられるものであることを今一度確認して、次に移りたい。⁶⁾

1 b. puis que..., CVS

Ex. 5) puis que cil dui sont venu, or sui ge toute seüre que ge n'i morrai
jamés seule; (76, 15-7)

〔あのお二人が来られたからには、私は一人で死ぬことにはならないと確信できます。〕

上の例文5がここに属する唯一の例である。ここでは副詞« or (= maintenant) »が主節の第一文肢として出ること、そこに倒置を来している。ただし、倒置とは言っても、IIで見える「一文型」においては« puis que »節そのものが倒置要因にほかならないのと異なり、ここで倒置を招いているのは主節の第一文肢のせいである。

« puis que ..., or ... »は、« or »の意を汲みとると、« maintenant que ... »に置き換えるのがふさわしいが、敢えて« or »を意識しなければ« puisque »でも充分である。実際、« puis que »節を受ける« or »に具体的な意味的価値を認めるべきかは疑問である。その性格は、« quant »節を受けて主節の冒頭に現れる« si »によく似ている。ただ、« si »と異なるところは、文頭で発せられる« or »には情動的強調とも言うべきものが感じ取られることだ。⁷⁾また、« si »の後では主語が現れないのに反し、« or »は例文5のように主語を必要としている点も付け加え強調しておきたい。⁸⁾

I c. puis que..., CV

Ex. 6) Puis qu'il vos est einssi avvenu, (...), a souffrir le vos couvient;
(65, 35-7)
(このようになった以上、あなたはそれに甘んじなければならない。)

Ex. 7) mes puis que ge nel sai, a souffrir le me couvient ... (66, 33-4)
(しかし、知らない以上、私はそれに甘んじなければならない。)

この2例のみが主節に主語を欠く。いずれの主節も非人称動詞の« couvenir a + inf. »でできており、変わるところと言えば与格の代名詞のみである。36例を抽出した中で主節に主語を欠くのがこの2例であるのは単なる偶然であろうか。主語人称代名詞が好んで用いられるようになった理由のひとつとして、それが動詞第二位文を作るための文頭辞として最も使いやすいとの説明がある。そもそも意味的実体を指し示さない非人称主語の« il »にその説明は一層有効であると言える。従って、文頭に選ばれるのが非人称主語ではなく別の文肢であれば(上の2例では« a souffrir »)、非人称主語はその存在理由を失う。ここにおける« il »の省略にはそのような説明が成り立つだろう。敢えてこのような理由付けを行うのは、« puis que »節に続く主節ではそのような説明の成り立つ特別な状況でない限り、主語は省略されないことを強調したいがためである。

« puis que »の意の確認に戻ると、「並列型」複文の用例の締め括りとなるこの2例においてもやはり現在の« puisque »の意が見出される。従って、「並列型」複文に対して本稿が求める一本の共通線とは、« puis que »の派生的用法、すなわち「理由」の用法ということになる。

II. Puis que..., VS

この形で現れるもの、すなわち« puis que »が「一文型」複文を構成する事例は、全36例中4例と目立たない。従って、注意を払われることなく見過ごされる結果とも

なる。しかし、次のように4例すべてを並べると、この文型に共通してある特性をたやすく見てとることができる。

Ex. 8) puis que ge portai primes corone n' enpris ge guerre dont ge ne
venisse a chief a l' enneur de moi et de mon roiaume; (104, 57-60)
(はじめて王冠を戴いて以来、私は私と私の王国の名誉のうちに終えずしては
戦争というものを企てたことがない。)

Ex. 9) puis que ge portai primes armes n' oi ge doutance por le cors d' un
seul home fors hui; (158, 35-6)
(はじめて武具を纏って以来、今日ほどただ一人の男のために恐れを抱いたこと
はない。)

Ex. 10) puis que el roiaume de Logres vint crestientez, n' i ot il bataille
ou il moreust autant de preudomes com il fera en ceste; (184, 72-4)
(ローグル国にキリスト教が到来して以来、この度の戦いで死ぬのと同じほど
多くの勇士が死んだ戦いはかつてあったためしがない。)

Ex. 11) puis qu' ele (= la guerre) fu del tot lessiee, la fis je recomencier
a mon oncle le roi Artu; (144, 57-9)
(戦争が(和議によって)完全に終えられたのち、私とその戦争を叔父アーサー
王をして再開させたのだ。)

見てのとおりこの4例では、先行する« puis que »節が文字通り文頭であり、まさしく文頭であるが故に、主節の冒頭に動詞以外の文肢が入り込むことを拒んでいる。ここにおける« puis que »に対しこれまでの« puisque »を当てることはいかように考えても無理である。また、例文3や4のように« puisque »との接点を探ることも不可能だ。この4例に見るのは、副詞(または前置詞)« puis (= depuis, après) »の意をそのままにとどめる「時」の用法——全例を通じて使われている単純過去がこの用法に協調する——にはかならない。

ただ、4例の共通性が同じ「時」であるとはいえ、前3例と最後の1例との間にはさらに一線を設ける必要がある。すなわち、全3例はいずれも否定主節を有し、いずれも« puis que »の訳としては« depuis que »がふさわしい。それに対し、唯一肯定主節を有する例文11には« depuis que »は不可能であり、« après que »あたりを持ってくるべきだろう。

2年前の論文の段階で、私は« puis que »を「並列型」複文を作る接続詞の中に分

類し、そうしつつ« *ainz que* »が「一文型」をなすものであることに不可解を感じ疑問を提出していた。というのも、前者は« *posteriorité* »（本来は）を示し、後者はその対立概念の« *antériorité* »を表すという、両者は「時」の従属接続詞として互いにパラレルな関係にあるからだ。しかし、« *puis que* »が本来の「時」の用法としては「一文型」をなすことが判明したことによって、その疑問は水解する。

ところで、この4例の主節が全て主語——しかも人称代名詞の——を有している事実に改めて注目しておくべきかもしれない。本稿で検討してきた36例のうち主節に主語を欠くのはそこに非人称動詞の使われた2例のみであった。ところが、ここではその非人称動詞においても（例文10）主語が顕在している。ということは、「時」の用法としての« *puis que* »節は、すぐ後に動詞を従える第一文肢としての働き以上に、主語を顕在せしめる牽引力を有していると思えるのである。同様の牽引力を例文5の« *or* »に認めることができる。しかし、例文6、7の« *a souffrir* »にその力は認められない。いずれにしても、これは主節の文頭における« *or* »や« *a souffrir* »の性格であって、「理由」の意の« *puis que* »は主節の語順とは無関係である。一体、いかなる類の文肢が私の言う「牽引力」を有し、いかなる文肢がそうでないのか。これもまた今後追求すべき問題であろう。

* * * * *

全36例の分類は以上である。大多数を占める「並列型」用例の中に隠れて注意を引きがたいものの、« *puis que* »節が倒置主節を従え「一文型」構文を招く場合、それはこの構文が« *puis* »の意をそのまま引き継ぐ「時」の用法にほかならないことを告げており、転じて「理由」の意で現れる「並列型」とは異なる用法だということを示している。ただし、本来の「時」の意を示す「一文型」の構文がそもそも本来の構文であったというわけではない。というのも、「一文型」複文なるものは動詞第二位文の定着にともなって生じてきた近代的な構文であると考えべきだからだ。⁹⁾ この近代的な文型の出現のおかげで、« *puis que* »の本来の用法と派生的用法の区別が明瞭になったとすることができる。このことは、文型あるいは語順の違いが意味の弁別に通じ、より正確な意味の伝達に寄与する場合があることの一例として着目しておいてよいだろう。

冒頭でも述べたように、本稿で得た結果は古仏語全般に及ぼせるものではない。しかし、『アーサー王の死』における« *puis que* »の用法と文型との対応関係はあまりにも明瞭であり、それが単なる一テキストに限られた現象であるはずもない。この結果を他の様々なテキストに照らし合わせることによって裏付けを行うとともに、その限界をも明らかにすることが今後の一つの課題となろう。

注

1) 『広島大学フランス文学研究』第10号, 1991年, pp.19-34.

2) Jean FRAPPIER (éd.), *La Mort le roi Artu*, 3ème édition, Droz, Genève / M. J. Minard, Paris, 1964.

3) 論をしぼる処置として, « puis que » 節が主節に先行する場合でも, 次のように « puis que » の前にさらに別の要素, すなわち語順に関与する恐れのある別の要素が現れている例は除外した。

onques puis que ge li oi dites nouveles de vos ne sai ou il ala,
(77, 46-7)

また, 同じく主節が命令法のものも, それ自体主語を欠く理由で, 除外してある。ちなみに, それに該当するのは下の2例で, いずれも主節は « or (ore) » で始まる。

Puis qu' il se velt celer, fet li rois, or le celoms bien;
(11, 25-6)

*Seigneur, fet Lancelos, puis qu' il est einssi que vos voulez
assembler a eus, ore esgardez donques qui primes s' en istra.*

(115, 17-9)

4) « quant » 節に続く主節で主語が省略される割合は, 従って, 40%強である。そのうち « quant ..., si ... » の形が90%に及ぶ。この « si » は « puis que » と共には用いられない。「quant ..., si ...」に対応するものと言えば, « puis que .., or ... » である。ただし, « or » は, 命令文でなければ, 主語を必要とする。

5) J. JEANNEAU, *La Mort du roi Arthur*, 10/18, 1983.

M. Santucci, *La Mort du roi Arthur*, Champion, 1991.

6) SVC主節を有する用例のうち本文で紹介できなかったもの(25例)の箇所を以下に挙げておく。

5, 17-8/ 36, 48-50/ 41, 35-7/ 45, 53-5/ 50, 66-8/ 77, 41-3/ 89, 34-5/
90, 59-61/ 92, 19-20/ -, 36-9/ 100, 59-62/ 109, 41-2/ 110, 56-9/
111, 29-32/ 119, 49-50/ -, 79-82/ 125, 13-4/ 137, 3-6/ 148, 20-2/
-, 68-70/ 160, 65-7/ 194, 35-6/ 201, 13-5/ -, 36-41/ 203, 32-4.

7) この点については, 「or + 命令法」に関するものではあるが, 例えば次の指摘が参考になる(また注3の「or + 命令法」の2例を参考にされたし)。

*On le voit : or n' est pas cet adverbe signifiant « maintenant », qui, parfois, perdant sa signification mais gagnant une « valeur affective », se retrouve devant un impératif par exemple... (Ch. MARCHELLO-NIZIA : *Dire le vrai: l' adverbe « si » en français médiéval*, Genève, Droz, 1985, p. 40.*

8) « puis que ..., or ... »のパターンは『アーサー王の死』では例文5の1例のみであるが、『聖杯の探索』(*La Queste del Saint Graal*, éd. A. PAUPHILET, C.F.M.A. Paris, 1980)にも次の1例が見出される。

Sire, puis que vos me lessiez, or *remaindrai* je toz seus en cest país,
(p. 34, 1-2)

9) 拙論「古仏語複文の二文型について」, pp. 27-31。

下の2例は『テーブ物語』(*Le roman de Thèbes*, éd. G. RAYNAUD DE LAGE, C.F. M.A., Paris, 1969)のもので、いずれも« puis que »は« après que »の「時」と解釈される。

Puis qu'il mesavint a ton pere,
tu *feïs* acorde a ton frere (v. 1299-1300)

Puis que vendra au grant destroit
li *rendrez* vos trestout son droit; (v. 1381-2)

「並列型」の上例と「一文型」の下例に関し、私は先の論文(pp. 26-7)において、下例を疑問文と解釈すべきだと述べたが、その解釈の根拠は薄れる。疑問文でないとすれば、「近代的構文」の一例が躊躇い気味に現れているということになる。

Les emplois temporel et causal de «*puis que*» en ancien français
— selon *la Mort le roi Artu* —

Ryuji TAIKO

Cet article est un rapport, basé sur le texte de *la Mort le roi Artu* (éd. J. Frappier), concernant des emplois de «*puis que*» en ancien français, vus en correspondance avec leurs structures phrastiques.

Quand la subordonnée précède la principale, l'ancien français disposait de deux types différents de combinaison. Nous en qualifions, pour la commodité, l'un d'*uni-phrastique*, et l'autre de *bi-phrastique*. Une phrase complexe peut être considérée comme *bi-phrastique* quand une pose syntaxique sépare la subordonnée et la principale. Mais quand la subordonnée, fonctionnant comme premier segment de la principale, fait suivre immédiatement le verbe, ce type de combinaison peut être interprété comme *uni-phrastique*.

Dans le texte en prose la combinaison *bi-phrastique* apparaît en principe en «subordonnée + principale au verbe médian», et celle *uni-phrastique* en «subordonnée + principale en V(S)». Ainsi, dans *la Mort Artu*, les phrases introduites par «*quant*» sont sans exception *bi-phrastiques*, tandis que celles qui commencent par «*ainz que*» sont toujours *uni-phrastiques*. Quant à «*puis que*», qui paraît favoriser la combinaison *bi-phrastique* (32 fois): *puis que vos le connoissiez, vos me poez bien dire qui il est*, (24, 14-6), cette conjonction connaît également l'autre type (4 fois): *puis que ge portai primes corone n'empris ge guerre dont ge ne venisse a chief a l'enneur de moi et de mon roiaume*, (104, 57-60).

Sur les 32 occurrences de la combinaison *bi-phrastique*, 29 fois il s'agit d'une principale en SVC (24, 14-6; -, 17-9 etc.); 1 fois d'une succession «*puis que ... , or VS*» (76, 15-7); les deux phrases restantes ont des principales au verbe impersonnel «*couvenir*» sans sujet (65, 35-7/ 66, 33-4). Tous ces exemples de construction *bi-phrastique* ont en commun d'être interprétés au sens dérivé de «*puis que*», c'est-à-dire au sens causal, sens moderne «*puisque*», sauf quelques réserves pour de rares cas qui veulent être lus comme «*lorsque*» ou «*dès lors que*» (98, 39-42/ 119, 109-16), mais qui, d'ailleurs, ne sont pas tellement loin de l'emploi causal.

La combinaison *uni-phrastique* «*puis que ... , VS*» se trouve en revanche au sens propre de «*puis que*», c'est-à-dire au sens temporel: «*depuis que*» pour 3 exemples qui ont la principale négative (104, 57-60/ 158, 35-6/ 184, 72-4), et «*après que*» pour le dernier en principale affirmative (144, 57-9).

Le fait n'est pas d'une grande portée, mais nous croyons qu'il mérite l'attention parce qu'il s'agit là d'un des cas où une certaine structure phrastique, une certaine distribution des mots est liée à une valeur sémantique et contribue ainsi à rendre plus clair un sens particulier.